

新形赤電話機

1971



1971年(昭和46年)
小型軽量で、デザインを一新した新形赤電話機が昭和46年11月に登場した。大形赤電話機に比べ、受話器を置く部分が5センチ低く、重さは3キロも軽くなり、店頭での出し入れが容易となった。また、変形貨幣や異物等による“貨幣づまり”をフックボタンの操作で除去できるようになった。

特徴

料金投入は、一度に10円硬貨6枚が可能。
ダイヤル通話のほか、店の人に申し出れば110番・119番・104番・105番・100番への通話が可能。

100円公衆電話機

1972



1972年(昭和47年)
昭和47年12月から100円硬貨も使用できる黄色の公衆電話機が登場した。「追加投入の手間が省ける」「催促音が気にならない」と好評。

特徴

料金投入は、一度に10円硬貨が10枚、100円硬貨が9枚となっており、10円硬貨と100円硬貨を同時に投入した場合は、10円硬貨の方から先に収納される。また、100円硬貨を使用した場合には、料金が100円単位で収納され、これに満たない時分で通話を終了しても100円分が収納される。

新形青電話機

1973



1973年(昭和48年)
昭和48年3月に新形青電話機が登場した。従来の青電話機はボックスに入れられ、道路、公園等に設置された。道路交通事情の悪化にとまらぬ、ボックス設置のスペース確保が次第に困難になった。一方、赤電話機は夜間になるとほとんどが店の中にしまい込まれ、これらの問題を解決するため登場したのが新形青電話機で、終日使用できる屋外用委託公衆電話。小さなキャビネットに入れられ、店先等に設置された。

特徴

110番、119番へは左下の赤ボタンを押してダイヤルすると、お金や鍵を使わなくとも通報できる。
料金投入は、一度に10円硬貨6枚が可能。
すべてのダイヤル通話が可能。

プッシュ式
100円公衆電話機

1975



1975年(昭和50年)
100円公衆電話機の回転ダイヤル部分の代わりに、押しボタンダイヤルを取り付けたプッシュ式公衆電話機が、昭和50年9月から登場した。この電話機は100円公衆電話機と部品の共用化を図ったため、形状・大きさ・色彩は同じとなった。

特徴

料金の投入・収納については、100円公衆電話機と同じである。110番・119番へは新形青電話機と同様、赤ボタン(緊急通報用ボタン)を押して番号をダイヤルすれば硬貨なしで通報できる。

1948年	1951年	1953年	1955年	1969年
度数料1円	簡易電話所廃止・委託、簡易公衆電話制度導入、度数料5円	加入区域内から市内1度数 10円 加入区域外からの発信市内1度数 15円		市内通話3分打ち切り
	簡易電話所からの市外通話は所定の通話料のほかに1度数につき1円20銭	加入区域内からの市外通話は一般市外通話料を3分またはその端数ごとに課する 加入区域外からの市外通話は3分またはその端数ごとに一般の市外通話料に10円を加算	指定通話区間の市外通話料を5円未満の端数を減額し、14円は10円、21円は20円とする	
簡易電話所				